

日本の都・東京 季節感あふれる列島、共生・継承の精神いかし次世代価値創生 ～第1部 東京の歴史的成り立ち 地形を活かし技術を活用し都市創生(その1)～

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

○地球規模・人類史的な視点からの地方創生

地方創生の必要性が叫ばれて久しい。かつての経済成長期、地方対策といえば過密過疎、地域格差是正の観点から語られてきた。しかし、昨今は、人口減少、地方消滅の脈絡で語られている。だが、そう悲観することもない。もつと目を見開き地球規模の視野で、世界史的なスパンをもって捉え直してみると、またいろいろなことが見えてくる。

そうした広大なスケール長期のスパンから地方創生を捉えるに、丁度、良い題材が身近にある、東京である。東京とて地球規模で捉えれば一地方であり、魅力的な都会の創生に向け、その途上にある。そこでここでは東京の前身の江戸時代から、これまで400年間の中で起こった様々な動きを紹介しながら、人類社会発展の世界史的な動きとも絡め、次代に向け東京を中核にした地域の、新たな創生の物語を語ってみることにしたい。



日本の姿を衛星から望む

第1部 東京の歴史的成り立ち

1. 近世都市・江戸

- (1) 寛永の江戸
- (2) 元禄の江戸
- (3) 文化・文政の江戸

2. 近代都市・東京

- (1) 明治・大正の東京
- (2) 昭和の東京
- (3) 平成の東京



日本の中核・東京

第2部 超都市地域・東京

1. 日本の国土と社会の変化

- (1) 全国の都市化と日本の東京化
- (2) 地球社会の変化と将来の見通し
- (3) 知識情報社会への歩み

2. 日本の文化

- (1) 日本の原風景としての自然風土
- (2) 日本文化の歴史的形成過程
- (3) 生活文化面からみた民族的特徴

3. 都市づくり

- (1) 近代都市への批判と対応策
- (2) 都市づくりの方向
- (3) 実現の方策

「地方創生」支援プロジェクト



第1部 東京の歴史的成り立ち 地形を活かし技術を活用し都市創生（その1）

まずは、東京の歴史的成り立ちである。ここでは近世江戸から始めることにする。

1. 近世都市・江戸

■国家経営の理念と幕府の位置決定

慶長5（1600）年、天下分け目の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、慶長8（1603）年征夷大将軍に任ぜられ江戸に幕府を開く。家康の国家経営の理念は「平和・安定」である。足利の世は乱れに乱れ、応仁の乱以降 100年以上もの長きにわたって、戦乱の世を招き人々を苦しめてきた。

そこで天下を手にした家康は、下剋上の思想に終止符をうち、戦国の世から脱し、平和で安定した秩序ある世の中を実現するため、新しい国づくりに入る。

家康は、幕府の所在地を決めるにあたり、朝廷・公家の干渉を排し武家政治の独立性を確保するため、尊敬する頼朝の例にならい、全国統治の拠点を、京を遠く離れ煌びやかな生活に墮落することなく、厳しく国家経営に勤しめる場所として、武士の発祥の地、関東の江戸を選ぶ。

関東は日本の地理的中心に位置し、国土経営における地政上の優位性を有している。また、江戸は関八州の中央に位置し、波静かな湾奥にあり後背地も広い。自然地形をみると西には幾重にも谷が入り、起伏の激しい武蔵野台地が手のひらを上げたような形で迫り、思いのほか険しい。さらに、その西は天下の險・箱根の山で遮られている。また、東には大河川が注ぎ、南には江戸湾が広がっており、軍事・防衛上の面からみても大変に有利な条件を備えていた。

さらによく見ると、江戸の周辺には北から東にかけて、手を加えれば農業生産力が上がりそうな肥沃な低地が広がり、国家の経営が安定すれば、新田開発や国内の物資流通また海外との交易にも便利ということで、家康は当面の都市防衛と土地の将来性などを考え、幕府の所在地として江戸の地が最もふさわしいと判断した。



江戸の原地形



寛永の江戸

「地方創生」支援プロジェクト



(1) 寛永の江戸

■防衛都市の建設

さて、江戸の都市づくりであるが、江戸は近世社会の発展段階に応じ、創成期と成長発展期そして安定成熟期とに分けることができる。そこでそれぞれの時代を代表する寛永、元禄、そして文化文政期を中心に、段階を追って江戸の都市づくりを述べることにする。

まず、創成期の江戸であるが、この時代の都市づくりの目標は、「防衛都市の建設」である。家康とそのブレーンが構想し、秀忠・家光を経て第四代将軍・家綱の時代にまで及んだ、全国統治の拠点として「防衛」をテーマに進められた、「寛永の江戸」と呼ばれる城下町としての性格をもつ、政治的意味合いの強い都市の建設である。

当時、徳川氏は幕府は開いたものの、大坂にはなお秀吉の遺児・秀頼がおり、秀吉恩顧の西国大名も数多くいて未だ世情は安定せず、戦乱はなお一触即発の状況にあった。

そんなわけで初期の江戸は、戦国都市（城下町）としてイメージされ、守りを主眼に都市づくりが行われた。都市の守りの程度は、その中心である城に近づくに従って、より堅固につくられていった。

寛永の江戸は、現在のほぼ都心に相当する江戸城外郭、つまりおおよそ外濠で囲まれた区域を対象とした都市づくりである。家康は築城の名手藤堂高虎と共同して、都宮である江戸城と都市江戸の建設計画を描いた。

防衛都市江戸の都市建設の内容は、①城の縄張り（統治者の館の整備）、②武家地の割付（支配階層の事務所と住まい）、③町人地の町割（都市サービス提供地域の整備）、そして④寺社地の給付、といった四つの内容により構成されている。

家康は高虎に城の縄張り（地形を観察して各建物の配置を軍事的に決定する）を命じるとともに、高虎の描いた絵図面に家康自ら朱や墨を入れ、高虎・案を修正する形で計画をとりまとめた。

こうして江戸城の位置は、武蔵野台地を構成する七つの台地上の軸線をのぼした、その焦点にあたる本丸台地が選ばれた。江戸城普請の大計画は、翌慶長9（1604）年に発表されるが、実際に、天下の総城下町として江戸の建設が開始されたのは、翌慶長10（1605）年のことである。

なお、家康は時を経てさらに南光坊天海らと共同し、宗教面と政治思想の面からも、この都市づくりにアプローチを加えていった。

■都市構造と都市づくり

江戸の建設は、本多正信が二代将軍秀忠の後見人として指揮を執り、城普請の専門家藤堂高虎のノウハウを用いて進められた。

大都城の建設には、水と食糧の確保が第一である。上水は小石川沼から取水してできた神田上水を用いた（やがて水源は井の頭となる）。水が確保されたら、次は食糧である。徳川は呉服橋から大手町に至る道路の北側に道三掘を、また江戸湾沿いには小名木川・新川などの内陸沿岸運河を建設し、食糧や塩（製塩地は行徳）などの輸送ルートを整備した。

さらに、江戸暮らしにあたり必要となるタンパク源を確保するため、大坂・摂津の佃村から漁師を呼び鉄砲州沖の干潟を与え、江戸湊での漁を請け負わせた。

「地方創生」支援プロジェクト



さて都市江戸の建設であるが、幕府はまず江戸前島（日比谷入江の対岸に位置する、本郷台地から南にのびる半島状の島地）を掘削し、建設資材の受け入れ用の埠頭として、楯型の計 10 本に及ぶ船入り堀を築いた。

翌慶長 11（1606）年には、伊豆等から切り出した石を江戸へと運んで、江戸城の城壁工事を開始した。江戸城城廓の建設に伴って掘り起こされた本丸台地の土は、現在の皇居外苑から日比谷公園そして新橋にかけて広がる、日比谷入江の埋立てに用いた。霞が関から新橋に至る大名屋敷地の造成は、大名自らが入海を干拓して行った。

また、神田台を崩した土で江戸前島を造成し、日本橋・京橋そして銀座に至る一帯を、排水施設等を備えた町人地として整備した。

幕府は小河川や渚などを活用し、河川の流路を変えたり、新たに水路を造成するなどして、慶長 16（1611）年には城を取巻く形に内濠を完成させた。これに続き寛永 13（1636）年には、水道橋から飯田橋の間に位置する牛込・市ヶ谷・四谷そして赤坂、溜池に至る堀が開削され、これを汐留川につなげることで、とうとう城を取巻く形に外濠をつくりあげた。

一方、町人地の中心・日本橋には、ここを起点に全国に向け、五街道（東海道・中仙道・甲州道中・奥州道中・日光道中）が放射状に整備された。各街道には一里（約 4 km）塚が築かれ、そこには榎の大木や松が植えられた。

また、これにあわせ宿駅と伝馬の制度も設けられ、その起点の日本橋界隈に、大伝馬町、南伝馬町、小伝馬町などの流通業務地区が整備された。さらに、「の」の字の形に造られた濠と五街道との接点には橋を架け、見付と呼ばれる城門 36 か所と見張所を設置し、市中への人や物の出入りを改めた。東海道の虎ノ門、甲州道中の四谷門、上州道の牛込門、中山道の筋違橋門、奥州道中の浅草橋門は「江戸五口」といわれ、江戸への出入りにあたっての関門となった。

江戸をよくみると、直線道路や十字路また交差点の少ない都市であることに気づく。これは敵に攻められたとき、その侵入速度をスローダウンさせるためであった。また、町の要所要所には木戸を、また都市の出入口には大木戸を設けるとともに、主要な街道沿いには大寺院（隠れ軍事拠点）を配するなどして、幕府はいざというときに備えた。

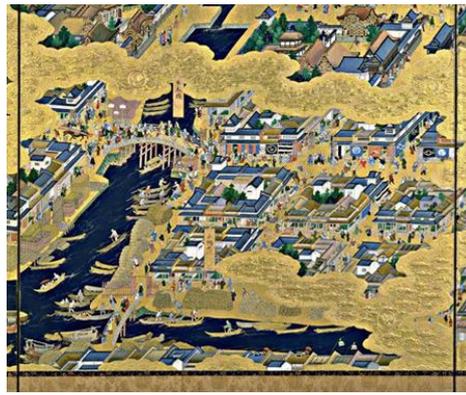
そうして都市の骨格を整えた上で、幕府は自然地形を活用し、城の西側・山の手には要塞としての武家地を、また城の東側・下町には武家の消費生活を支える町人地を、さらに都市周辺部を中心に寺社地を配置していった。こうして防衛力を高めていった都市・江戸であるが、その外側の隅田川と多摩川が自然の防衛ラインを形成していたことはいうまでもない。

「地方創生」支援プロジェクト





江戸の防衛



都心・日本橋

■市街地の構成

○武家地の形成

都市江戸の中心は江戸城である。家康は江戸城を構築すると、同じ城郭内に将軍のほか親藩御三家の屋敷も置き、そのまわりに濠（内濠）をめぐらし、外部の市街地と遮断した。

そして徳川の譜代大名など主要な大名の屋敷は、大手門前（現在の大手町）から日比谷入江を埋め立て、新しく開発された平地（現在の皇居外苑から丸の内）に配置した。この時期、諸藩の江戸屋敷は幕府に帰服する姿勢を示すため、争って日光東照宮の陽明門並みの構えをもつ、将軍のための御成門を備えていた。このため大名屋敷が並ぶ大名小路は、それは絢爛豪華な町並みを形成していた。しかし、残念ながら明暦の大火により消失してしまった。

外様大名は主として、その一つ外側の桜田から芝愛宕下にかけて配置された。これらの大名屋敷街は、60間、80間、120間という設計寸法を基本に、グリッド状に割られ計画的に整然と造られていった。この街割りは、今日もお引き継がれている。

また、幕府直参の旗本・御家人衆の住まいは、城西から城北にかけて配置された。代官町、永田町、番町、麴町、駿河台などが、それである。番町は中級武士の屋敷地で、四谷、市ヶ谷などには下級武士の組屋敷などが立地した。そしてその外側には、もう一本濠（外濠）を築き、外部と遮断した。

○町人地の形成

武士階層等に各種都市サービスを提供するための町人地は、その活動の利便性を考え、海に面し水運の便のよい下町低地の平場に配置された。

慶長17（1612）年6月、家康は、この町人地の町割を担当する総指揮者として、後藤庄三郎光次を指名した。町人地の道路パターンは、メインストリートである本町通りと、これに直交する日本橋通りが約11m、それ以外の道路は約6mの幅員で、排水勾配に留意して整えられた。

町割としては、一町60間四方の街区が基盤の目状に構成された。街区はさらに三分割され、20間の奥行きをもつ土地に区分された。そして街区の中央には会所と呼ばれる空地进行を配し、ここには共同便所や井戸、ゴミ溜め場などが置かれた。

この下町の町人地を上空より俯瞰すると、水路によって囲まれた多くの島々から成り立っているように見えた。町には水路に沿って河岸ができ、その後ろには町屋が並び、それらを連ねる形

「地方創生」支援プロジェクト



に中心街が形成された。町々の出入口には木戸があり、木戸脇の番屋には番人が置かれ人の出入りを監視した。

○寺社地の形成

寺社地は都市の周辺部の交通の要所や低湿地また埋立地などを選んで配置された。

特に、大寺院は外濠の外の江戸への主要な交通ルートに沿って配置された。例えば、東海道には芝の増上寺、奥州道には浅草の浅草寺、中山道には上野の寛永寺といったように、陰陽道における江戸の鬼門にあたる方向に配置された。増上寺や寛永寺は、徳川家の歴代将軍の墓所としての役割も担うが、真の狙いはいざというとき都市江戸と徳川家を守るための防衛上の目的をもっていた。

この増上寺と江戸城そして寛永寺は、西南から東北の方向に一直線に並んでいる。このような関係にあるその他の寺社としては、日枝神社と神田明神社それに徳川家の祈願所としての浅草寺がある。幕府はこのようにして将軍と徳川家を魔物から護るため、宗教上の配慮をも加え江戸城を中心に計画的に寺社を配置していった。

■寛永の江戸

江戸の都市づくりにあたり、徳川氏は天下普請と称する軍役にも似た労務の提供を各藩に命じた。これは外様大名に労力と費用を負担させることで、彼らの財力を削減し勢力をくじくとともに、その一方で徳川自身は堅固な城や都市を築いて防備を固めるという、一石二鳥の巧みな統治政策であった。幕府は外濠が完成すると、江戸建設に大名やその妻子を留め置く必要がなくなったことをうけ、これに代わって妻子江戸在府・参勤交代の制を確立し、江戸を全国の縮図とすることで天下を巧みに統治していった。

正和元（1644）年における、江戸の市域面積は約 44 平方キロメートル、ほぼ外濠で囲まれた範囲内におさまっていたが、例外的に外郭の外においても浅草や芝などの町が、主要街道に沿って部分的に市街を形成していた。当時、江戸とともに三都とうたわれた京が、市域面積約 21 平方キロメートルであるから、江戸は京のほぼ 2 倍の規模を有していたことになる。この時期の江戸の土地利用をみると、武家地が 77.5%、町人地が 9.8%、寺社地が 10.2%、その他が 2.5% という構成になっていた。

江戸時代初期の寛永の江戸は、平和を求める世の中の空気を反映してか、ハードとしての自然地形をベースにした巧みな防衛都市づくりと、大名の妻子江戸在府や参勤交代また改易や転封、そして鎖国など、ソフト面からの諸制度の整備・運用とがあいまって、徐々に家康が願った平和な世の中になっていった。

（2）元禄の江戸

■災害が都市を変える

江戸は半世紀近く続いた、埃深く喧騒が渦巻く建設の時代が終わると、政治的安定を見たこともあり幕府は減税策をとった。また、この時期、藩財政の三分の二は参勤交代や江戸藩邸における消費生活に向けられていた。

「地方創生」支援プロジェクト

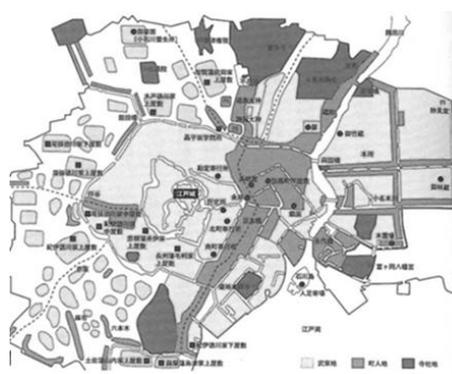


こうして江戸は消費経済化が進むと、地方から多くの人々を吸引し、市街は過密な状況を呈するようになる。こうして経済の季節を迎え、江戸は関東そして東日本における広域経済圏の中心都市として、「市」の機能の充実が求められるようになった。

そうした時期の明暦3（1657）年、江戸は正月早々、「明暦の大火」といわれる日本の歴史始まって以来の大都市災害に見舞われる。このとき江戸は大名屋敷 160、旗本屋敷 770 余、寺社 350、橋 60、蔵 900 を失い、10 万人以上の焼死者を出した。江戸城も西の丸だけ残し焼けおちてしまう。こうして家康以来三代かけて建設してきた「寛永の江戸」も焦土と化し、市域の 55% が灰となってしまった。



明暦の大火



元禄の大江戸

■都市の防災構造化、大江戸の整備

そこで幕府はこれを契機に、江戸とその周辺の経済圏域を対象に都市改造と地域開発を進め、都市の防災構造化と河川・運河網の再編整備を図ることになる。

この経済の成長発展期における都市づくりの目標は、「都市の防災構造化と圏域の物資輸送路の整備」を課題とした、大江戸化への対応である。松平信綱らが構想し大岡越前らがこれを継ぎ、享保の改革を挟んで明暦の大火後から明和の時代にまで及んだ、安全・流通をテーマに進められた「元禄の大江戸」と呼ばれる、消費都市としての性格を持つ江戸とその経済圏域の整備である。

幕府は大火の後、焼土や瓦礫などを用い、赤坂・牛込・小石川の各沼地や、築地、本所・深川などの水面・湿地を埋立てていった。災害の処理が終わると、幕府は都市改造計画の策定にあたり、江戸を実地測量し都市地図を製作した。また、調査の結果、大火の要因の一つが巨大な建築物の飛び火にあることが判明したので、幕府は市街の建築密度を落とすべく都市の拡大を図り、道路や水路また空地を十分にとった都市改造計画を策定する。

都市改造にあたっての方針は、①城内にある御三家の藩邸を城外に移し、その跡地は馬場や菜園などの空地とする、②江東地区また山の手に新市街地を開発し、竹橋、常盤橋、代官町等にある武家屋敷を移す、③諸大名の火災時の避難先として山の手の外に下屋敷を下賜する、④旧市街にある寺社を郊外に移す、⑤旧市街においては道路を拡幅したり区画を整理するなどして再開発を進め、火除地を設置したり耐火建築を奨励するなどして防火化を進める、と定められた。

また、江戸の消費都市化にあわせ、都市活動を円滑に進めるため、順次、関東内陸における河川網の改編を進め、都市江戸への物資輸送路の確保と流域の地域開発を図った。

「地方創生」支援プロジェクト



■都市改造

○都心部再開発

江戸の大名屋敷は、通常上屋敷（大名の邸宅と藩の事務所）のほかの中屋敷（大名の妻子などが住む）、そして下屋敷（藩主の別荘、藩の倉庫、災害時の避難先）の三種類がある。そこで幕府は、このうち都心部に立地する必要のない大名屋敷や寺社を城郭外へと移すことで、空地を増やし火災時の延焼拡大の防止を図ることとした。

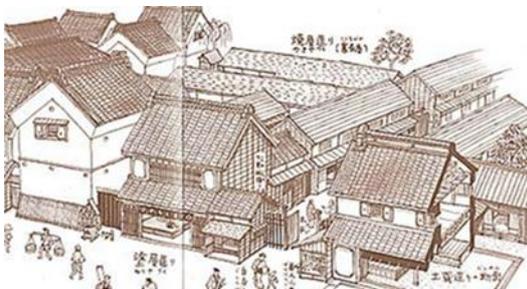
こうして明暦3（1657）年には69寺が浅草など外濠の外へと移転させられた。また武家も万治元（1658）年だけで900家以上が移転した。そうした再編過程で日本橋通りは従前の10.9mから18.2mに、また本町通りも13.8mに、それぞれ拡幅された。その他の道路も避難を考え、従前の5.9mから9.9～11.8mへと二倍近く広げられた。上野広小路、中橋広小路は、このとき火除地の性格をもって整備されたものである。

また、河川を利用し日本橋川の兩岸などには、「防火堤」という土手の築造も行われた。これらの火除地や防火堤の配置にあたっては、江戸の風向にも配慮がなされた。さらに、橋が焼け落ち避難ができず、被害を大きくした面もあったので、避難路確保ということで橋を延焼火災から守るため、橋のまわりに「橋詰広場」が設けられた。その代表が両国広小路である。

また、大火後は大規模な建物の建築が禁止されるとともに、屋根を瓦でつくることや建物の土蔵化が奨励された。享保5（1720）年になると瓦葺き屋根が奨励され、税金の免除や資金の融資により建物の屋根不燃化が進められた。

これに伴い町屋は、土蔵造り（屋根は浅瓦葺き、外壁を土塗りのうえ漆喰仕上げとしたもの）、塗屋造り（屋根は浅瓦葺き、二階正面のみ外壁を土塗りのうえ漆喰仕上げとし、その他は板張りとしたもの）、焼屋造り（屋根・壁ともに板張りとしたもの）という三つのタイプの建築物によって構成されることになった。

また、明暦大火の翌年には、幕府役人による定火消しの制度もできた。これにつづき、寛文元（1661）年には町々の木戸（二ヶ所）に消防用水として30個づつ水桶を配備することと、各家毎にも間口に応じ手桶の設置が義務付けられた。さらに、享保8（1723）年になると、奉行の大岡越前守が、火の見櫓の設置と町火消しの制度を確立する。



江戸の建物の防火種別



防火堤と橋詰広場

「地方創生」支援プロジェクト



○隅田川架橋と江東地区の新市街地開発

利根川の東遷と新河川江戸川の整備により、河川の氾濫も穏やかになった江東地区では、北十間川と横十間川によって囲まれた区域の内側が市街地として開発されることになった。

幕府は江東地区の陸地化にあたり、万治3（1660）年、両国橋を架橋した。これにつづいて新大橋が元禄6（1693）年、永代橋が元禄9（1696）年、大川橋（吾妻橋）が安永3（1774）年に架けられた。江東地区は小名木川と平行に堅川と北十間川を、さらにこれと直交して大横川と横十間川などを開削し、水路や道路などの都市基盤が基盤の目のように入る、整然とした市街として造成された。

こうして堅川より北つまり本所地区は、主として旗本の邸宅地として下級武士の組屋敷となった。この地区の飲料水は、埼玉の溜井より水を引き亀有上水を開設することで対処した。この江東地区の最南端は深川で、ここは海運と河川の船運とが交差する場所として大変重要であった。深川にはもともと船蔵があったが、大火後は復興用資材確保と、燃え草を江戸の中心部から遠ざける観点から、木材業者がここ深川の木場に集められた。また、日本橋川沿岸に集中していた米蔵など重要物資の倉庫が、危険分散の観点から浅草や本所・深川などに分散して配置されることになった。

○郊外開発とニュータウン建設

大名の中屋敷・下屋敷などが立地する郊外武家地は、青山・赤坂・麻布などを中心に、主として武蔵野台地の居住性のよい尾根部分を選んで、玉川上水から分水して青山上水を開設することで、計画的に開発されていった。

この武家地の郊外開発に伴い、武家地と武家地との間の谷地には町屋が入り込み、武家屋敷群と一体となって次第に市街を拡げていった。いわゆる郊外スプロールである。

江戸元禄の活気あふれる時代、江戸の西郊、市街を一步出たところに、浅草は阿部川町の名主・高松喜兵衛ら5名の手により、ニュータウンとして新しい宿場町・内藤新宿が開設された。このとき幕府は5,600両という巨額の運上金（開発負担金）の上納を条件に、新駅開設の認可と営業の権利を与えた。

これは民間による宿駅という社会資本の整備でもあった。高松喜兵衛らは、大木戸の門外から追分までの東西9町余（約1,200m）南北1町たらずの間に、幅5間半（約10m）の道を開き町屋を造成、総計738軒の町並みをつくりだした。宿場はやがて飛脚や芸人なども出入りし、新開地の活気あふれる町となっていった。

■関東河川網再編と大江戸流通経済圏の形成

江戸は人口の集中と消費経済化に対応し、食糧の増産を図るとともに、流通圏を拡大し様々な物資を全国的に動かすことで、人々の生活を豊かにしていくことが課題となっていた。

そこで幕府は、新田開発と物資輸送路の整備、そして流域の治水を兼ねた多目的の地域開発事業に本格的に取り組むことになる。江戸期の地域開発は新田の開発で、今でいう工業団地の造成にあたる。徳川幕府中興の祖・徳川吉宗は下総や武蔵などで、また重商主義を掲げ明和の隆盛を導いた田沼意次は、手賀沼や印旛沼などで、新田開発を強力に進めた。

この時期、日本の長距離高速輸送手段は舟運である。廻船組織もでき、本州の沿岸は商業航路

「地方創生」支援プロジェクト



で結ばれ、全国的な規模で市場流通が行われていた。そこで幕府は、安定した物流ルートを確保するため、強風による危険性の高い房総周りの航路を避け、内陸の下総台地に水路を開設し、関東平野の二大河川水系である渡瀬川・鬼怒川水系と利根川水系とを、内陸運河としてネットワーク化した。こうして東廻り航路は那珂湊又銚子湊で川舟に切替え、経済の大動脈である内陸河川を経て江戸に至り、市中の河岸で荷揚げされるようになった。



関東河川網の整備



江戸の水路

■元禄の大江戸

このように江戸は、明暦の大火という最大級の都市災害を契機に、都市の拡大と圏域の整備が進み、関東ないし全国経済圏を対象とした、広域的な中心都市として消費流通都市としての性格を帯び、大江戸を形成していった。

この結果、享保 10 (1725) 年には、江戸の都市区域は 69.93 平方kmに達した。そして市街は、北は浅草・千住辺りまで、また東は亀戸辺りまで広がり、江戸は元禄期の 1700 年頃にはすでに大江戸 808 町を形成し、人口 100 万人を越す大都市に成長していた。当時、ヨーロッパで第一の都市ロンドンが人口約 70 万人、パリが約 50 万人であったから、江戸はもうこの頃から世界一の大都市であった。

この時期の 17 世紀から 18 世紀初めにかけて起こったあいつぐ大火、これに伴う江戸市街の復興を一大ビジネスチャンスととらえ、巨万の富を築きあげた材木商人がいた。紀国屋文左衛門と奈良屋茂左衛門である。彼ら上方商人の活躍で、江戸経済は著しく発展した。この経済の隆盛に伴い上方文化が江戸に移入され、歌舞伎、俳句、浮世絵を筆頭に、江戸では武士や有力町人を担い手とする元禄文化が開花した。

(3) 文化文政の江戸

■余暇文化が都市の装いを変える

18 世紀後半、老中・田沼意次は重商政策をとり商人を優遇したため、商人が活躍できる環境が整った。この時期、日本橋の魚河岸や蔵前の札差し（金融業）などは大きな利益をあげ、上方に対抗できる江戸の商業資本が形成されていった。こうして、江戸は上方と並ぶ全国経済の中心地に発展、物品は市場に溢れ江戸期を通じ最も活気溢れる時代となった。

この時期、商人の生活ぶりは大名を凌ぐまでに成長、彼らは「粋」とか「通」など気風のよさを自慢し、吉原遊廓などで豪華な遊びを競うようになった。これが江戸っ子のはじまりである。

「地方創生」支援プロジェクト



文化文政期の第十一代将軍徳川家斉の時代に、商人達にひっぱられるようにして花開いた、江戸独自の町人文化を化政文化という。人々は天下泰平の世において、豊富な余暇時間を活用し、武士から町人に至るまで、多彩に文化の花を咲かせ生活を楽しんでいた。

■祝祭都市づくり

この時代、江戸の都市づくりは安定成熟期に入り、余暇生活の充実を求める市中の空気に対応した取り組みがなされた。

この文化文政期における都市づくりの目標は、「祝祭都市づくり」である。明和の経済的繁栄を果実に、幕末勤皇の志士達の動きが出るまでの間、商人や町人が主体となって「余暇活動」をテーマとした、「文化文政の花の大江戸」と呼ばれる、文化都市としての性格をもつ、大江戸の多彩な町づくりが進められた。

○遊興・娯楽場の隆盛

江戸市民の三大娯楽の一つ芝居は、中村座・市村座・森田座が江戸三座と称され繁栄をみていた。この他にも市中には 100 軒以上もの寄席ができ、落語など市井の芸を集め町人を楽しませていた。相撲も両国の回向院が定場所となり益々盛んになった。また、江戸は女性が少なかったこともあり遊廓が発達した。幕府公認の遊廓は吉原唯一つで、そこには最盛期 4,000~5,000 人の遊女がいた。この他にも人で賑わう場所には岡場所と呼ばれる遊び場が、最盛期 190 近くもあり、江戸四宿とともに遊里の機能を果たしていた。もちろん普通の銭湯（浮世風呂）も風呂好きの町人の間で大繁盛していた。

この頃、松平定信の寛政の改革をうけ、庶民の教育機関として寺子屋が急速に発達した。その結果、江戸市民の識字率が飛躍的に高まり、天保年間には空前の読書ブームを引き起こし、市中の貸本屋の数が 800 を超えるようになった。また、全国各地の寺社や温泉池などの名所巡りも盛んになった。身近な趣味として植木づくりや花卉栽培が大いに流行した。花見は寺社の祭礼や花火など年中行事と結びついて益々盛んになった。こうして町人文化が最盛期を迎えると、江戸文化が全国各地に伝わり、江戸への観光客が増大していった。そうして大江戸は全国的な文化センターとして、次第に祝祭都市の趣を濃くしていった。

○まち並み景観の形成

江戸のまちは、潮見坂・富士見町の地名が示すように、地形面で起伏の激しいところで、市中の多くの場所から江戸湾や富士山が望めた。江戸の眺望の良さは、その土地柄もあるが、文化年間に家屋の軒高が約 7.3m以内と規制されたことも、これに寄与している。

その江戸も後期を迎えると、町人地は表通りと裏通りとでは建物の構造や意匠も次第に異なっていき、その場所の雰囲気や環境を反映したものに変わっていった。この時期の代表的な町人地風景は、街路沿いには青果や雑貨などを売る商人が町屋を構え、その裏手の路地に面した長屋には大工や左官など職人が暮らすというパターンである。

この時期を迎えると、職人たちも江戸初期のように同業者で集まって住むということは少なくなり、いろんな職業の人達が混在して住むようになった。その結果、大通りにそった場所は自然と土蔵造りや塗屋造りの町屋となり、軒の高さや建物の高さが統一されていった。また、主要な

「地方創生」支援プロジェクト



通りに面する建物の外装には、墨汁を加えた「かきがら灰や石灰」が塗られ、艶出し仕上げが施された。これが白木屋や越後屋また山本山などの大店が軒を連ね、日本橋のメインストリートを飾った黒壁の街並み景観である。



芝離宮庭園



お江戸日本橋・駿河町の町並み

○フェスティバル

江戸の祭りで有名なのは、天下祭としての山王社の山王祭と、神田明神社の神田祭である。これに深川・富岡八幡宮の深川祭りを加え、江戸三大祭と称した。

また、三大祭ほどではないが、四季折々の寺社の祭礼や縁日などには、綱渡りなどの曲芸や居合い抜きなどが披露されたり、象やラクダまた虎など珍獣の見世物小屋や茶屋などが立ち並び人々を楽しませていた。目黒・目白・目赤・目青・目黄といった、五つのお不動さんへの参拝にも、たいそうな人出があった。隅田川での花火見物と屋形船も、お客が庶民一般へと広がり大いに賑わった。

■自然共生型の町づくり

○庭園都市

江戸はこの時期、庭園都市であった。上野台地には桜、その谷向こうの本郷台地東斜面にはツジ、またその西斜面には菊といった具合に、花の山脈が形成されていた。この他にも品川の御殿山とか隅田川河畔など、江戸の花の名所は数多くあった。

都市・江戸の花は、武家地の庭園にも数多く咲き誇っていた。江戸中期、都市防火対策としてオープンスペースを広くとった武家屋敷であるが、経済の発展を経て、この時期になるとオープンスペースの庭園化に力が入った。その数約 270 といわれる大名諸侯は、上屋敷のほかに中屋敷・下屋敷（複数）を抱え、その屋敷地の多くに庭園を設けていた。従って、江戸市中には大名だけで 1000 近い林泉を備えた庭園があった。

庭園をもつ傾向は、その数約 5000 といわれた旗本また大商人にも及び、商業庭園や寺社の庭園まで含めると、文化文政期の江戸には数千から一万近い数の庭園が散りばめられていたことになる。この他、御家人も小さな庭を有し花卉類を育てていたし、町人達も路地などに植木鉢を置いていた。この時期、町人の間でも園芸が盛んとなり、武士も町人も工夫して菊や万年青また朝顔などの栽培に精を出し、その色や形を競い合った。

当時、園芸は江戸で一大ビジネスとなり、ご隠居さん達は余暇時間を活用し一攫千金を夢みては、植木づくりなどに精を出した。そんなわけで都市江戸の様を上空から俯瞰すると、四季折々の花に彩られた緑の庭園と、葺屋根の家屋とがモザイク状に組み合わせられ、まさに別世界を現出

「地方創生」支援プロジェクト



していた。また、都心・下町や江東地区には水路が巡り、河畔には柳が降りて大変風情があり、詩情豊かで大変美しい都市であった。まさにこの時期の江戸は、文字どおり花の大江戸を形成して「都市全体が文化財」という様相を呈していた。

数ある大名庭園の中でも戸山にあった尾張家下屋敷内の庭園は特にユニークで、13万6千坪（約45ha、日比谷公園3個分）の広大な庭園内には、箱根山（標高44.6m）のほか大小の池を配したうえで、東海道の宿場町・小田原宿を模した延長140m、総計37軒にも及ぶ町並みを創り出していた。また、ここだけで通用する貨幣まで造られ、武士やその家族らを楽しませていた。いまでいうテーマパークである。



尾張家下屋敷・戸山山荘



庭園内に再現された小田原宿

○資源循環型の町

江戸時代の人々は、地形の重要性を知っていた。河川沿いの湿地帯には水田を作り、高台で水害のない山の手には、上水を確保したうえで武家屋敷を配した。また、主要な街道は台地の尾根筋を通るよう工夫され、谷筋には町屋が配置され、自然と共生する形で整備されていた。

江戸では市民の台所を賄うため、郊外に野菜栽培を手掛ける近郊農家が成立した。そして都市と近郊農村の間では、町中で発生する下肥と農家で生産する農産物とが頻繁に行き来していた。この時期、近郊農家の間には「江戸稼ぎ」という言葉があった。これは朝早く農家が荷車に野菜類を積んで、神田や四谷などの青果市場に出て、帰りにはその空き車に、市中で購入した野菜栽培用の堆肥（人の糞尿）を載せて帰る、商行為のことである。そんなわけで内藤新宿や千住などの宿場町は、江戸の肛門といわれ、町中からの排泄物の主要な出口となっていた。

江戸では、下肥だけでなく、竹木や紙屑また古着や金属製品に至るまで、リサイクルが活発に行われており、まちづくりのハードもソフトも、現在よりずっと環境共生的で資源循環型であった。

江戸では人々の生活のリズムも、太陽の明るさによって規定されていた。江戸はどの季節も日の出の頃を「明け六つ」、日が沈んでもいくらか明るい日没の頃を「暮れ六つ」と定め、その間を六等分しこれを一刻と定め、鐘の音で市民に時を告げていた。このように江戸は、お天道さまの歩調にあわせ時が伸び縮みしており、人々はサマータイムどころか、完全季節対応型の生活をしてきた。

「地方創生」支援プロジェクト



■文化文政の花の大江戸

19世紀初め、文化・文政期の江戸の人口は、約120万人ほどに膨らんでいた。1801年のロンドンの人口が約85万人であったから、江戸は世界的にみても大変な大都市であった。

幕末の慶応元（1865）年、江戸の区域面積は79.8平方kmに達していた。その内訳は武家地が63.5%を占め、以下、町人地が17.8%、寺社地が12.7%という構成である。

また、江戸には車両規制があり、駕籠の使用は制限されていた。二輪の大八車は許されていたが、四輪の馬引き車の使用は、「一般通行を妨げる」ということで、厳しく制限されていた。

第1部 参考資料

川添登：東京の原風景 NHKブックス，日本放送出版協会，1979

内藤昌：江戸の町(上・下)，草思社，1982

正井泰夫：城下町東京，原書房，1987

鈴木理生：都市のジャーナリズム 江戸の都市計画，三省堂，1988

藤森照信：明治の東京計画，岩波書店，1990

越沢明：東京の都市計画，岩波書店，1991

田村明：江戸・東京まちづくり物語，時事通信社，1992

陣内秀信：東京の空間人類学，筑摩書房，1992

石川英輔：江戸空間 100万都市の原景，評論社，1993

小木新造：江戸東京学への招待(一)文化誌編 NHKブックス，日本放送出版協会，1995

小木新造・陣内秀信：江戸東京学への招待(二)都市誌編 NHKブックス，日本放送出版協会，1995

鈴木博之：日本の近代 10 都市へ，中央公論社，1995

宮元健次：江戸の都市計画 講談社選書メチエ 66，講談社，1996

石川英輔：大江戸庶民事情，講談社，1998

童門冬二：江戸の都市計画 文春新書，文芸春秋，1999

河村茂：日本の首都 江戸・東京都市づくり物語，(株)都政新報社，2001

第1部 掲載写真等

日本の姿を衛星から望む <http://blog-imgs-90.fc2.com/>

日本の中核・東京 / <http://livedoor.blogimg.jp/>

江戸の原地形 <http://image.search.yahoo.co.jp/>

寛永の江戸 出典「草思社「江戸の町」」

江戸の防衛 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

都心・日本橋 <http://www.rekihaku.ac.jp/>

江戸の建物の防火種別 <http://park5.wakwak.com/>

「地方創生」支援プロジェクト



防火堤と橋詰広場 <http://park5.wakwak.com/>
関東河川網の整備 <http://www7b.biglobe.ne.jp/>
江戸の水路 <http://hiroshige100.blog91.fc2.com/>
芝離宮庭園 <http://gorimon.com/>
お江戸日本橋・駿河町の町並み 出典「三井文庫」
尾張家下屋敷・戸山山荘 出典「JTB パブリッシング「江戸東京の庭園散歩」2010年」
庭園内に再現された小田原宿 出典「三井文庫」
東海道線・高輪辺り <http://auctions.wing.c.yimg.jp/>
一丁倫敦・馬場先門交差点 出典「三菱地所(株)」
大正期の路面電車の走る銀座 <https://jp.pinterest.com/>
浅野セメント深川工場(大正5年) <http://www.yurindo.co.jp/>
昭和初期の田園調布 <http://touyoko-ensen.com/>
震災前後の鉄道整備の進展状況 出典「東京都市計画百年 東京都都市計画局 1989年」
関東大震災の被災区域と災害状況 <http://junko-mitsubishi.blog.so-net.ne.jp/>、<http://d.hatena.ne.jp/>
開発当時の多摩ニュータウン <http://blog.livedoor.jp/>
多心型都市構造概念図 出典「日本の首都 江戸・東京都市づくり物語, (株)都政新報社, 2001」
新宿副都心 <http://ameblo.jp/>
東京タワーの完成 <http://mainichi.jp/>
新宿駅の通勤ラッシュ <http://karapaia.livedoor.biz/>
地下鉄と私鉄との相互直通運転 <http://www.tokyometro.jp/>
東京大都市圏の市街化状況 <http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/>
首都圏の高速道路網 <http://image.itmedia.co.jp/>
大都市圏の中心部・緑地とビル群 <http://news.ameba.jp/>
文化都心(職住遊融合)・六本木ヒルズ <http://livedoor.blogimg.jp/>
大規模緑化・東京ミッドタウン <http://www.tokyo-midtown.com/>
テーマパーク・東京ディズニーランド <http://userdisk.webry.biglobe.ne.jp/>
ごみ分別収集 <http://shimotsuke.genki365.net/gnks17/pub/>
東京駅丸の内駅舎の復元・保存 <http://www.nta.co.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

